



第31号

令和3（2021）年11月26日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10月以降入会 1,500 円

歴研日曜サロンから

「ベールを脱ぐ謎の城 鬼ノ城」

ー鬼ノ城に温羅はいなかったー

講師：総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井 典子氏

令和2年（2020）12月27日、日曜サロンが開催され、平井典子氏による鬼ノ城についての講演に34人が参加した。最新の発掘の成果を踏まえ、これまでベールに覆われていた鬼ノ城の真実の姿を明らかにしていただき、その後熱心な質疑応答が交わされた。

歴史好きとしては、鬼ノ城と温羅伝説との関係に興味をひかれるところであるが、講演では温羅伝説の話はほとんどなかった。質疑応答の中で、「温羅伝説はあくまでも伝説であって、考古学による科学的実証と混同してはならない。伝説の存在自体を否定するものではないが、温羅伝説は観光施策上の引用戦略であって、いくらロマンがあっても歴史学上の史実とは異なる。築かれた鬼ノ城に温羅という鬼が

歴・研・展・望

後期高齢者と呼ばれる歳に近づいてきた。偉人と言われる人たちは晩年をどのように過ごされたのか、大いに興味がある。中でも、気になるのが犬養木堂先生と津田永忠である。

私は、庭瀬駅にある展示の扇子にある木堂先生の詩「本来無一物、而無塵可拂」（生まれながら何ももってない。よって払うことができる塵もない。）に共感、共鳴している。小さな分野で専門家になったという積りであるが、広い世の中から見ればわずかなことで、知らないことの方がはるかに多い。木堂先生はそのことを十分承知していて、血気に逸る将校たちに「話せばわかる」と問いかけ、諭そうとしたのではないかと。また、現に遺言に、葬儀は質素に、墓には「備中庭瀬の人 犬養毅」とだけ書けと遺している。

その木堂先生も晩年、一度、政界を引退した。が、地元の後援者がその補欠選挙で再度、担ぎ出し当

選した。そして、その後、総理大臣、5.15事件となった。

一方の津田永忠は、岡山藩の池田光政、綱政、父子に仕え、後樂園など後世に残る仕事を数多く遺している。岡山歴史研究会の立ち上げ集会の際、顧問の柴田一先生から「大学の学問は四年で終わるが、耳学問をする気になれば一生できるぞ。津田永忠は中学も高校も出てないぞ。」と印象に残る話を伺った。あれだけのことを遺すには相当の耳学問をし、又努力も重ねたはずである。しかも永忠は67歳にして末子をもうけている。

私自身、社会人になって以来、関わってきた水処理の仕事を未だに続けている。今年に入り、湖沼の浄化法について3件目の特許の申請をしたところである。それにしてもやり残したことが多く、迷いの日々が続いている。

(会長代行 楠 敏明)

いたという史実はない。温羅伝説は垂仁天皇の時代が舞台。鬼ノ城ができたのは調査の結果 7 世紀後半で、時代も全く異なっている」との解説があった。

以下に、当日の資料をもとに講演内容の概要を紹介する。



古代山城 鬼ノ城の概要

・時期

平成 11（1999）年度の発掘調査で出土した土器から、7 世紀後半の築造と判明。

7 世紀第 4 四半期の土器を主とし、7 世紀第 3 四半期に遡ると思われる土器を少量含む。

・構造

吉備高原の南端、標高 397m の鬼城山 8 ～ 9 合目傾斜変換点付近に、一部自然地形を利用しながら、約 2.8km にわたる城壁を巡らす。瀬戸内海につながる吉備中枢地の平野部に面した南側は、急峻で攻めにくい地形となっている。

未完成とみられる山城が多い中、神籠石系山城^{こうごいし}としては稀な完成した山城といえる。

〈城壁〉

直線的に築かれ、「折れ」と呼ばれる屈曲部を形成。

基底部約 8m、高さ約 6m、75 度前後の角度で立ち上がる。

城壁のほとんどは、版築工法で築いた土塁。一部、要所要所に石垣（石塁）を築く。

土塁部分は、裾に据えた一段の列石を露出させている。

4 つの門と 6 つの水門、防御施設である角楼を付設。

城壁内外には敷石を敷設。

〈城内〉

7 棟の建物群（管理棟 2 棟、倉庫 5 棟）、鍛冶工房、溜井、版築土塁用の土を採取したと思われる土取り跡、山頂の烽火場跡^{のろし}と思しき被熱による赤化箇所などを確認。

第 3、第 5 水門の谷の上流には、貯水と水量調整をするための土手を築く。

池ノ下の水城

鬼城山から 1.8km 南東にある池ノ下には、水田の中に一直線に家が建ち並んでいる箇所がある。ここは水田面より高く、水はけが良いため、家がこの上に造られているわけであるが、この土手は山と山の間を塞ぐように築かれている。

岡山県古代吉備文化財センターがこの土手を調査した結果、人工の土手で、基底部幅21m余り、高さ3m程度であることが判明した。出土した土器や植物遺体の放射性炭素年代測定から、5世紀～16世紀の中で築造されたものと考えられる。（注：年代に幅があるのは、6世紀後半の須恵器や室町時代後半の瓦質土器や銅銭などが出土しているため）

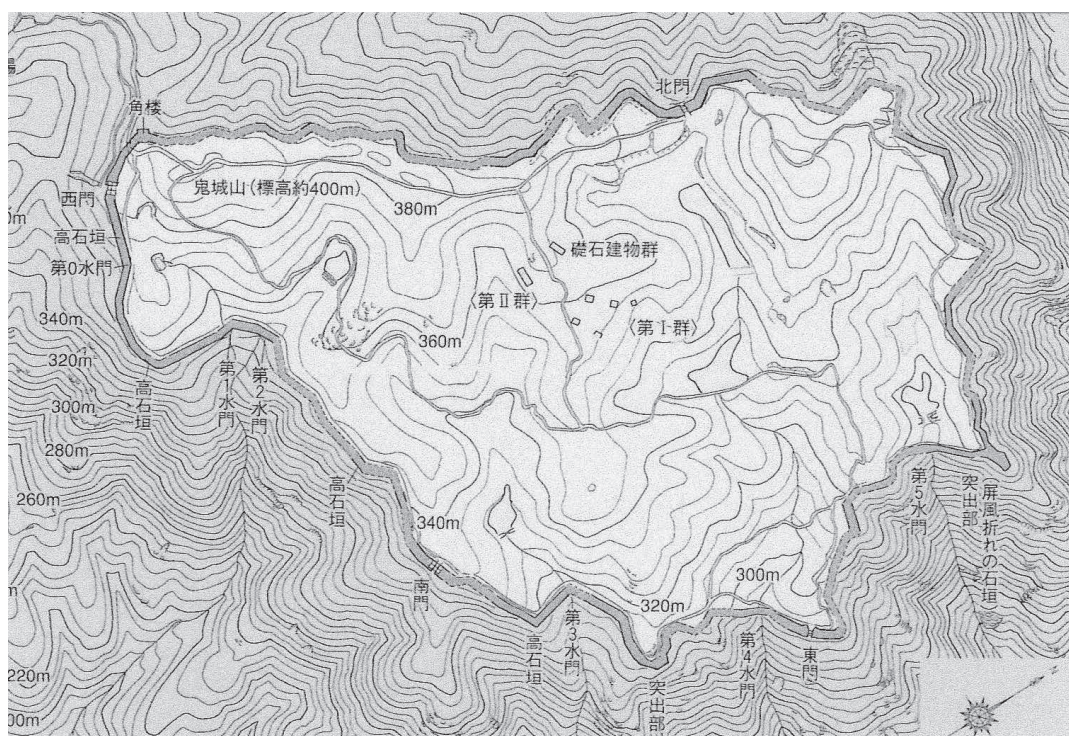
しかし、土手の状況を考えると、規模は異なるが大宰府の博多湾の前に築かれた水城^{みずき}と同様のあり方をしており、これを第一防衛線として大宰府の官人たちが大野城へ逃げ込むように、吉備でも鬼ノ城に逃げ込むことを想定していたのではないだろうか。そうであるなら、池ノ下の土手は鬼ノ城とほぼ同時期に築造され、その内側には、吉備の大宰府が存在した可能性も考えられる。

（参考）

西日本にはおよそ30の古代山城があるとされ、これらは、唐と新羅に滅ぼされた百済の遺臣の救援に向かった倭軍が白村江の戦い（663年）に敗れたため、報復を恐れた倭政権が北部九州から瀬戸内海沿岸に防衛施設として造った城とされる。歴史書に記載があるものを朝鮮式山城、記録がないものを神籠石系山城とも言う。

鬼ノ城については、歴史書には記録がない。昭和53年（1978）以降数回の学術調査が行われ、鬼ノ城についてはかなりのことが明らかになった。平成23年（2011）には第Ⅰ期整備事業が終了して、西門が現在のような形に復元された。

また、吉備津彦命が吉備の鬼神と戦ったという話は古くから伝承されているが、鬼神の名を温羅としているのは、江戸時代後期の『備中国大吉備津宮略記』と幕末期の『吉備津宮縁起』であり、共に垂仁天皇の時代のこととしている。垂仁天皇は4世紀前半頃の天皇であるが、その実在性は必ずしも明確ではないとの説もある。



鬼ノ城全図

「総社市秦の郷」 ウオーキング

会員 井上 秀男

総社市秦^{はだ}の郷をめぐる歴史ウオーキングが2021年10月1日実施され、32名の参加者があった。朝9時にサントピア岡山総社に集合して、秦歴史遺産保存協議会会長の板野忠司さんから史跡の案内スタッフ、当日の資料などについて説明を受ける。板野さんをはじめスタッフの方々には、総社駅からの送迎や車に分乗させていただいての移動、現地での説明などで大変お世話になった。

今回の歴史ウオーキングでは、総社市秦の郷と称されている地域にある古墳群と、式内社で磐座^{いわだたみ}をご神体としている石畳神社^{いわたたみ}、製鉄の神を祭神として祀る姫社神社^{ひめこそ}、飛鳥時代の秦原廃寺跡等を訪れた。

最初に金子石塔塚古墳（6世紀後半）と家形石棺^{かたがら}を見学、次に秦大冢古墳（4世紀前方後円墳）を見てサントピアに戻り、徒歩（一部の人は車）で山道の丘陵地を登った。途中古墳の表示板が見られ、一丁冢古墳群^{いちぢょうぐら}を通り過ぎ、さらに登って茶臼嶽古墳に向かう。茶臼岳古墳は荒平山の標高192mの茶臼嶽という丘陵尾根の見晴らしの良い場所にあり、全長55.4mの前方後方墳である。つぼ型土器の破片が多く出土して、つぼの底に穴を空けた「底部穿孔^{ていぶせんこう}」といった特徴から、古墳の年代は3世紀の後半～末頃と推定されている。

少し戻って古墳群に向かう。一丁冢一号墳は、標高189mの場所に4世紀前半に築造された前方後方墳で墳長70m、県内では植月寺山古墳（勝田郡勝央町）に次ぐ2番目に大きい古墳とのこと。一部盗掘の跡があり、法華経の祭祀石材がある。この場所からの見晴らしは良くて高梁川、総社市一帯が見える。この場所で昼食をとる。

下山後、車に分乗して秦原廃寺跡に行き、寺院跡を見学。車中から秦天神社を見て、石畳神社、姫社神社を順次参拝、見学して日程を終えた。姫社神社は天日矛の妻阿加流比売^{あかるひめ}で比売語曾神とも呼ばれる製鉄の神とされ、高梁川西岸流域には製鉄関係の遺跡が見られる。

秦の郷には60基におよぶ古墳群が発見されて話題になっている。高梁川の東側には、最古形式の前方後円墳である岡山市の浦間茶臼山古墳が、墳長138mの大型前方後円墳として3世紀末ころに築かれ、5世紀には

全国で4番目の規模とされる造山古墳（墳長350m）が築かれる。これらの大型古墳が造られる以前の3世紀末に前方後方墳が総社市秦の地域に築かれていた点について、早い時期から巨大な勢力を握った集団が存在していたと推測される。その集団は渡来人の秦氏か、古墳の被葬者は誰なのか。秦の郷には中四国で最も古い秦原廃寺がある。この寺から出土した軒丸瓦は、秦氏の建立した京都太秦の広隆寺の瓦文様と類似しているとされている。今回の秦の郷の史跡を歩いて、高梁川流域の歴史の深さを感じると共に、今後の秦の郷の調査研究によって古代吉備国の歴史が解明されることを願っています。



一丁冢古墳1号墳



石畳神社

地域に愛され30年 歴史とロマン漂う新見美術館

館長 藤井 茂樹

新見市は、岡山県の北西部に位置し、中世の時代、京都東部の荘園・新見荘として栄えました。北は中国山地、南は吉備高原の一部を成し、鳥取県と広島県に接しています。

新見市の玄関口である JR 新見駅のホームに降りると、裏手の小高い丘に新見美術館が建っています。新見の地に美術館をという構想が生まれたのは、昭和 58（1983）年のこと。新見市出身で文人画家・富岡鉄斎（1836 - 1924）の研究家でもあった横内正弘（故人）氏から、「新見市が美術館を建てる計画があれば、自分の所有する鉄斎の作品など 300 点余りのコレクションを寄贈したい」旨の申し出があったことが発端でした。

当時、新見市には「清新な文化のまちにしよう」という市民憲章があり、美術館建設という市民のひそかな願いが現実のものとなりました。ところが、人口が 3 万人にも満たない小さな自治体が美術館を建設するということになれば、よほどの好条件でも揃わない限り、それがどのような市町村であれ議論を呼ぶのは当然のことでした。昭和 58 年頃の新見市は、周辺の阿哲郡四町と共同で新見女子短期大学を運営しており、これに美術館ができるとなると、市の財政を圧迫することになるのは間違いありませんでした。そういう考えから、美術館建設には慎重論や否定的な意見も多くありました。

美術館の将来性について様々な議論が行われ、運営方法については新見市の財政を圧迫しないよう財団法人を設立し、財団に美術館の管理・運営を委託するという方法が打ち出され、美術館建設が動き出しました。そして、平成 2（1990）年 11 月 1 日に美術館が開館、昨年開館 30 周年を迎えました。

美術館の外観は、中世風のイメージを表すために、入母屋・銅板葺きの屋根と石造りの外壁を持ち、この地方の風土と歴史を盛り込んでいます。カフェからは新見市街地を一望でき、平成 3（1991）年にはおかやま景観賞を受賞しています。春は桜、夏は青葉、秋は紅葉、冬は雪景色と四季を通じて自然豊かな新見を満喫することができます。

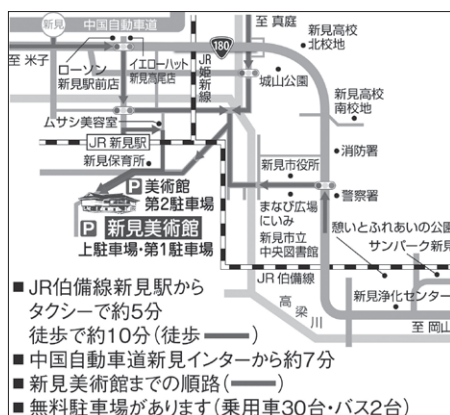
収蔵品数は現在 1200 点余り。その中心となる富岡鉄斎の作品 77 点は高い評価を受けています。その他、横山大観、竹内栖鳳、川合玉堂、上村松園などの近代日本画から平山郁夫、田淵俊夫、平松礼二、宮廻正明らの現代日本画。戦時中新見市に疎開していた洋画家・内田巖をはじめ、ゴヤの模写で知られる郷土出身の洋画家・藤井哲、現代の岡山洋画壇で活躍する作家の油彩画。金重陶陽、藤原雄、伊勢崎淳ら人間国宝の陶芸。文化勲章受章者・高木聖鶴の書など幅広く収蔵しており、これらはコレクション展で紹介しています。

また、春・夏・秋の特別展では、これまで「伊東深水展」「平山郁夫展」「堀文子展」「万葉の日本画展」「日本芸術院の日本画展」をはじめ、「マイメロディ&キキララ展」「ウルトラセブン展」「人形展」などユニークな展覧会も開催しています。

話題の展覧会を見るもよし、四季折々の風景を眺めるもよし、ぜひご来館いただければ幸いです。



枯山水庭園から見る新見美術館外観



新見美術館マップ

新見美術館利用案内

〒718-0017 岡山県新見市西方 361 番地

TEL/FAX 0867-72-7851

◇HP:

<http://www.city.niimi.okayama.jp/usr/art/>

その他、Instagram、Twitter 有り

◇開館時間:

9:30 ~ 17:00 (入館は 16:30 まで)

◇休館日:

毎週月曜日 (祝日の場合は翌日休館)

展示替期間中、12/27-1/4

令和2年（2020）11月以降に開催された歴研サロン等について

新型コロナウイルス感染症の蔓延が続く中、歴研サロン、日曜サロン等は予防対策を講じながら、断続的に開催されてきました。

10周年記念誌発刊のため令和3年春の会報発行が取りやめになり、8月発行の会報30号にも掲載することができなかったため、本号で令和2年11月以降に開催された歴研サロン等についてまとめて報告します。（会場は「東京・岡山歴史交流会」を除き、すべて「ゆうあいセンター」）

令和2年11月5日（木）

「岡山の教育史」

27名が参加して教育県岡山の教育の歴史を学びました。講師は石井保会長、雪吉政子副会長、山田良三事務局長、及びゲストとして山田方谷の教えを教育に生かしてこられた池田弘満先生（論語教育研究会副会長）にお願いしました。

まず山田事務局長より、「岡山の近世教育と岡山の教育」のテーマで問題提起がありました。続いて雪吉副会長より、「岡山の英語教育と女子教育の始まりとその歴史」について話があり、さらに「山田方谷の教えを教育に生かす！」として池田先生の話がありました。

休憩を挟んで石井会長より、御自身の経験を踏まえて「戦後岡山の理科教育」の話をいただきました。

その後はシンポジウムとして、会場からの質問なども踏まえて意見交換が進みました。会場には教育の現場で歴史教育に取り組む先生方も参加し、熱心な懇談の場となりました。



12月17日（木）

「サロン懇話会（交流会）」

恒例のサロン懇話会が開催され、テーマ①「渋沢栄一と岡山の縁」（高橋義雄氏）、②「伝説の報恩大師と備前・備中」（山田良三氏）の2テーマで話があり、熱心な質疑応答がありました。26名が参加。

12月27日（日）

「べールを脱ぐ謎の城 鬼ノ城」（日曜サロン）

本会報の1～3ページを御覧ください。

令和3年1月15日（金）

「サロン懇話会（交流会）」

新年最初の交流会は、9名が出席して楽しい交流、意見交換の場となりました。

2月9日（火）

「サロン懇話会（交流会）」

10名が出席して、「熊沢蕃山の教育」をテーマとして活発に意見交換がなされました。

3月7日（日）

「映像で迫る郷土の歴史遺産 沖新田・砂川・百間川の歴史を解説」（日曜サロン）

39名が参加。映像作家・監督の高畠正之氏に沖新田や砂川、百間川の歴史を映像を通して学ばせていただきました。ドローンを使っただけの撮影の映像など、とても迫力があるもので、それぞれの地域の歴史をよく知ることができました。その後上映していただいたC62型蒸気機関車やC12型蒸気機関車の映像も迫力満点で、楽しませていただきました。



7月10日（土）、11日（日）

「定説への叛乱 in 岡山 第二回 東京・岡山歴史交流会」

古代日本の中央は岡山（吉備国）だった

（全国歴史研究会及び岡山歴史研究会協賛）

7月10日（土）、11日（日）両日、岡山市内の蔭涼寺（中央町、臨済宗）で開催されました。コロナ禍のため開催が延期されていましたが、蔭涼寺の協力を得て第二回のシンポジウムを開催することができました。



今回の主催は同交流シンポジウム実行委員会（東京）、岡山代表 古川克行氏他、東京代表 前田豊氏他。講師は、出宮徳尚、佐藤光範、中西厚、丸谷憲二、高木寛治、谷山雅彦、岡将男、山田良三（以上岡山）、木佐敬久、平山牧人（以上東京）の各氏で、岡山歴研からも多くの講師が参加しました。

それぞれの研究成果を発表し、熱心な交流がなされました。東京で岡山の歴史を研究している方々と、岡山の地元で研究をしている方々の熱心な発表は、サブタイトルにある「古代日本の中央は岡山（吉備国）だった」という確信をさらに深める内容でした。来年には第三回を開催するとのことで、さらなる研究の進展とその発表・交流に期待が高まります。

7月18日（日）

「吉備津彦伝説の歴史的背景」（日曜サロン）

講師：矢掛町 極楽寺住職 武田恭彰氏



岡山県民には広く知られ、今では全国的にも知られて注目を集める「吉備津彦伝説」ですが、この伝説が生まれた背景や、歴史的事実との検証はどのようになっているのでしょうか。

今回の日曜サロンでは、26名が出席し、長年岡山や総社市の遺跡の発掘調査に携わってこられ、現在は矢掛市の極楽寺住職である武田恭彰氏から、長年発掘調査・研究に携わってきた経験や知識に加えて、宗教家としての見識も交えてのお話をいただきました。大変わかりやすく、伝説成立の歴史的背景や事実との照合を通して、伝説の持つ意味と、さまざまな背後の事情から歴史や伝説がどのように形成されていくのかをよく理解することができました。

政治・経済事情や、神仏習合の歴史などの宗教的背景も大きく影響を及ぼして伝説が形成されてきたとのお話に納得でした。

8月1日（日）

「御野郡の式内社と古墳と遺跡」（日曜サロン）

講師：当会顧問 野崎豊氏



野崎豊氏に講演をしていただきました。34名が参加。野崎氏は当会顧問で、神道や仏教の歴史に詳しく、今回は特に、現在の岡山市を形成している旧御野（三野）郡の式内社や古墳や遺跡に関して、たくさんの資料をもとにお話をさせていただきました。当初5月に開催予定だったものが、コロナ禍により今回の開催となりました。

私たちの郷土岡山は古代から文化が栄えたところですが、特に多くの宗教家を輩出してきた理由に、古代から宗教的な祭祀が重要視されてきた背景があります。豊富な資料を交えてのお話はとても興味深く、これまで知らなかった神社や祭祀のあり方や参拝の仕方などの話もあり、大いに参考になりました。

8月11日（水）

「熊山遺跡をめぐる人々Ⅱ」

講師：当会顧問、熊山遺跡保存研究会会長 岡野進氏

出席者は28名。令和2年(2020)9月の歴研サロンで発表された「熊山遺跡をめぐる人々」の続編で、熊山遺跡をめぐる和気清麻呂、秦氏、鑑真和上、報恩大師、法然上人、児島高德、黒田官兵衛について、詳細な資料を手作りで多数準備してくださいました。

熊山をめぐる人々が地元岡山のみならず、日本の歴史に極めて大きな影響を与えてきたことがわかり、あらためて熊山の持つ意義の大きさに驚かされました。岡野先生、ありがとうございました。



編集後記

聖杯（Holy Grail）という言葉をお存じだろうか。聖杯とはキリストが最後の晩餐で用いた杯であり、アリマタヤのヨセフ（マリアの夫のヨセフとは別人）が、処刑後に十字架から下ろされたキリストの血を受けた杯でもあるという。ヨセフはこの杯を現在の英国グラストンベリに運んだが、彼の死後行方不明になったとされる。中世ヨーロッパのアーサー王伝説などでは、騎士による聖杯の探求が中心的主題となっており、インディ・ジョーンズの映画にも登場する。欧米では、困難な探求を経て究極の目標や真実に辿り着くことを「聖杯を得る」と言うことがある。

昨年末に開催の日曜サロン「ペールを脱ぐ謎の城 鬼ノ城」では、平井典子氏から、発掘調査結果をもとに、鬼ノ城がいつ頃何のために造られたのかを明らかにしていただき、鬼ノ城には温羅はいなかったということも確認することができた。

鬼ノ城の謎については平井氏の講演で納得できたが、邪馬台国の所在地に代表されるように、歴史上の謎とされ未だに論争が続いているテーマも多い。邪馬台国については昔からさまざまな説が唱えられてきた

が、あえて言えば、説はもうほとんど出尽くしているのではないかと。そして、その中には「聖杯に近づいている」、あるいは「聖杯を得た」のではないかと思います。多くの説が含まれているのではないだろうか。

多数の説がある歴史上の事象について、さまざまな立場の論説を比較検討して自分なりにストーリーを組み立て結論を導き出すという作業は、ある意味で最高の知的エンターテインメントであり、醍醐味と言えるだろう。大いに歴史の謎を楽しみたい。

（井上知明）

発行 岡山歴史研究会
会長代行 楠 敏明
編集長 井上知明
事務局 〒701-0204 岡山市南区大福415-14
山田 良三方
電話 090-1033-3327（携帯電話）
FAX 086-806-2525
メール rekiken.okayama@gmail.com
ホームページ <http://b.okareki.net/>